A Pair of Blue Eyes: 恋愛対照法

内　藤　歓　修

処女作 *Desperate Remedies* (1871) から，最後の長編小説である *The Well-Beloved* (1897) まで，その作品の中でハーディが一貫して追及してきた主題は男女の愛である。愛の中心にいるのは常に女性であり，女主人公を軸としてドラマが展開される。殆どの場合1人の女性をめぐる2人の男性の恋愛関係であるが，更に多くの男女が関連し合う時も，1人の女性と2人の男性という構図が基調となっている。またこれらの男女の愛は穏やかで静謐な大人の愛とは正反対な，理性や分別を失わせる激しい愛である。恋愛をする前のこれらの男女は表面的には社会性豊かな紳士淑女であるが，一旦恋に落ちると，狂ったように理性を失い，因習や道徳といった社会的掟に背を向けさせる愛に身を任せ，不本意にも他人を傷付け，更には自らの破滅をも招かずにはおかない本能的激情に駆られ，その人物の本性を余すところなく暴露してしまうことが多いのである。

ハーディの3作目に当たる本作品 *A Pair of Blue Eyes* では，主人公たちは必ずしもこのような情熱的な恋愛をするわけではないが，作者はこの先，繰り返し克明に描いてゆく女心の特性—女らしさ，女の可愛さ，いやらしさ—を豊かに備えた女主人公を創造している。そして，気まぐれで，男の心をかき乱す，魅力的な女性 Elfride Swancourt に4人の男性を配し，都会を離れた自然豊かな地方を背景に，それらの男性の間を揺れ動く女心を描いている。舞台には，この作品に到って初めてハーディ独自の小説の世界が姿を現している。昔，南イングランドに存在したというアングロサクソン人のウェセックス王国の特定の地域を選び，そこの地形，景観，建物，遺跡，風土，風俗を想像の上で再構成したのである。ウェセックス地方はここでは未だ完全な姿とはなってはいないにしても，ほぼ全体的な輪郭は出来上がっていると言えよう。

ハーディが主要な長編を書いた時代は，自然と土への親しみに支えられていたイギリス農村社会が，経済的社会的に変化を遂げてゆき，農民たちの今までの内面の秩序と安定が，「都市」の影響を被って揺らいでいった時代でもあった。このような時代を見つめながら創作活動を続けたハーディの作品の立脚点は，ウェセックスの平和な農村社会に，その平和を乱す外部からの侵入者が入って来た時に生じる「農村」と「都会」の相剋を捉えるところにあった。それ故，ハーディの作品群を流れる基調低音となっているものの1つには，「田園的心性」と「都会的心性」の対立がある。

第1作の *Desperate Remedies* では，Cytherea Grace という清純で可憐な娘に，ハンサムで物腰

もエレガントであり，利口そうで立派に見える都会的青年 Aeneas Manston と，態度は万事控え目で好ましい性格の，自分の能力だけを頼みに生活に苦闘する，農村出身の真面目な建築家 Edward Springrove の 2 人が恋愛感情を抱くが，最後には彼女は「田園的心性」を持つ Edward と結ばれて幸福になる結末を迎えている。第 2 作 *Under the Greenwood Tree* でもこの構図は殆ど変わらない。この作品はロマンティックな牧歌的作品で，優しい素朴な味わいを持つ。この物語でも虚栄心の強い移り気な女教師 Fancy Day は，貧しい便利屋の息子 Dick Dewy と恋仲になるが，美青年という以外取り柄のない，この素朴な男性に何となく物足りない思いを抱いている。牧師 Maybold が Fancy に求婚して，この 2 人の関係に波風を起こす。この教養も財産もある人物に，欲しいものは何でもあげるから結婚してくれと言われ誘惑に勝てず，承認を与えてしまう。この事態からなら悲劇に発展するのが普通であろうが，ハーディはシェイクスピアの喜劇にならってハッピーテンディングにするため，Maybold にあっさり身を引かせ問題を途中で打ち切ってしまう。教養ある女教師で，都会的な Fancy ではあったが，未だ「田園的心性」が残っていたので，教養と財産のある都会的雰囲気を備えた Maybold を選ばずに，田舎者で素朴な Dick の求愛を受け入れている。初期の作品群では，かなり顕著に見られる「都会」対「田園」という対立関係で，「田園の勝利」というパターンが図式化され，論じられる。そして *Under the Greenwood Tree* はこの典型的な例となっているし，Wildeve や Eustacia の死は *The Return of the Native* をかろうじて初期のパターン内に留めている。だが，*The Woodlanders* では Grace Melbury が自分より階級の上の Fitzpiers と結婚し，婚約者 Giles Winterborne は失意のうちに死んでしまい，このパターンが丁度逆になる。その前の作品 *The Mayor of Casterbridge* では既に Henchard の何ら救いのない死が語られ，ハーディが読者の余りの非難に筆を折ったと言われる *Jude the Obscure* では，同様に主人公 Jude が絶望の果てに死に臨んでいる。このように中期，後期の作品は「都会」と「田園」の対立を背景にして悲劇で終わっている。こういった悲劇的結末は，ハーディの文学的構想の変化に伴うものであるにしても，既に初期の作品にその萌芽が見られることに注目すべきであろう。

Under the Greenwood Tree で Maybold 牧師が Fancy に書いた最後の別れの手紙の中で，Dick にすべてを打ち明けるように勧める言葉は，*A Pair of Blue Eyes* に重要なテーマとして継承され，最後には *Tess of the D'Urbervilles* の Tess に引き継がれ，より大きな悲劇を引き起こすことになるのである。

A Pair of Blue Eyes は，前 2 作の様々な問題を継承発展させ，後の作品に引き継いでゆく。田舎に住んでいるが「都会的心性」を持つ Elfride は，「田舎」出身の Stephen と相愛の仲になり，駆け落ちして結婚直前までいったが，心変わりをして，愛を成就できない。今度は「都会的」な，知的職業に就く弁護士兼評論家の Knight に夢中になるが，彼のひどい仕打ちによって恋に破れ，失意のうちに貴族の Luxellian と結婚するが，若死にしてしまうのである。これから，この筋に

沿って，先に述べた2つの問題点—「都会」対「田園」の対立と「告白したらどうなるか」という問題提起—や登場人物の性格などを加えて，本作品を考察してゆく。

女主人公 Elfride Swancourt は，充分な教育を受けた，教養ある美しく若い魅力的な女性である。知的訓練を受けているので，牧師である父に代わって説教の原稿を書くこともできるし，ロマンス風の小説「アーサー王城の宮廷」まで書いている。またピアノを弾き，歌をうたい，馬を巧みに乗りこなし，チェスも上手という多芸多才な娘である。しかし，感情の面では興奮し易く，不安定で，その感じ易い心は容易に傷付くが，半面とかげの尻尾切りのように簡単に治癒再生することができる。Elfride の受けた知的教育の影響は感情の面まで及んでいないようである。移ろい易い感情は危機や困難の場面に臨むと，理性の調整を受けずに気まぐれな感情となって表に現れ，衝動的且つ敏感に反応する。それ故，彼女の行動はしばしば決断を欠き，一貫性に乏しいことになる。田舎に住みながら，都会的な教育を授けられ，牧師としては充分過ぎるほど虚栄心の高い父親に育てられた Elfride の前に，大都会ロンドンから野心に燃える若い美貌の建築家が現れる。

Stephen Smith は，大都会からやって来た新進の建築家であるが，到着早々牧師 Swancourt 氏に名家の血筋であろうと早合点されて，出自を明らかにすることができなくなる。実はこの地方に住む石工の息子であるのだが，作者は彼がこの土地に関係が有りそうなことを匂わせても，なかなか身分を明かそうとはしない。このように謎めいた Stephen の言動は，騎士道物語を書くほどロマンスの好きな Elfride の心を捉えずにはおかない。更に，第5章で，Luxellian 邸で Stephen がある婦人を抱擁する姿がブラインドに映るのを目撃し，Elfride は好奇心と嫉妬心を掻き立てられる。このシーンは Stephen にまつわる謎の部分をより大きくし，Elfride の感情を Stephen により接近させる効果を持っている。作者もこのような感情が男女の愛において，如何に大きな役割を演じるかを充分に計算して読者の前に示しているのであろう。

Stephen と相愛の仲になってすぐ，Elfride は自分の置かれた状況を把握する。都会的に洗練された男性であるとばかり思っていた Stephen は，実はこの土地の石工の息子であり，階級的な劣等意識の虜になっていて，Elfride を万事に優れた，手の届かないほど素晴らしい女性と崇拝する従順な若者であることを見抜いてしまう。本質的には「田舎者」の特性を持っている Stephen に対して，田舎に暮らしてはいるが，受けた教育や知的生活環境により「都会的意識」を持つ Elfride は，彼に優越感を抱き，すぐに従順な奴隷の上に君臨する女王然とした態度を示すようになる。Stephen は，女性に時として見られる「柔軟な順応性」を身に付け，男性的な「断固とした行動」には欠けていて，彼女のこのような態度を簡単に受け入れる。こうして，Elfride にとって彼は「御し易い柔和な男」であることがはっきりする。ここで注意しておくべきは，Elfride と Stephen の両方共に言えることだが，生来「田園的心性」を持った者が都会の影響を大きく受けて，「都会的心性」を併せ持って成長し，両面性を持つようになる。だが，Elfride は

都会的志向が強く，Stephen は田園的属性を強く保持したままであるという相違点である。このように相似した心性の持ち主であっても，この２人が恋愛をするとその志向性がはっきり違って現れてくる。

Elfride は Stephen を好きになった理由を的確に理解している。「私，分かっていると思いますの，なぜあなたを愛しているかが。勿論，あなたは男前です。でも，そのつもりで言ったのではありません。あなたがとても従順で優しいからですわ」'I know, I think, what I love you for. You are nice-looking, of course; but I didn't mean for that. It is because you are so *docile and gentle*.'（イタリックス：筆者）（第７章）と，Elfride は本気が相当混じった恋のじゃれ合いの中で Stephen に言っている。力強い男らしさに本能的に惹かれる Elfride の心を，この 'docile and gentle'「従順で優しい」という男性が満足させることができないのは明らかであろう。Elfride がこの言葉を口にする前に，Stephen はいくつも彼女を増長させる要因を見せている。

第７章で，８月に再訪した時，Stephen は Elfride とチェスをする。指し方は Knight に借りた本で習って知っていたが，実戦は初めての Stephen は，女性の平均の腕前を上回っている Elfride の敵ではない。いち早くそれに気付いた彼女は初めの２番は，一生懸命考えている彼が可哀想になり続けて負けてやるが，３番目は簡単に勝ってしまう。Stephen は当然のことにそれに気付き，困惑と悲哀の気持ちに捕らわれる。

> He drew a long breath, and murmured bitterly, 'Ah, you are cleverer than I. You can do everything — I can do nothing! O Miss Swancourt!' he burst out wildly, his heart swelling in his throat, 'I must tell you how I love you! All these months of my absence I have worshipped you.'（第７章）

この 'You are cleverer than I.'「あなたは私より器用だ」という言葉を，ハーディが最初は「ターガン入江の絶壁」としか説明していない「ウィンディ・ビーク」という断崖に出かけた時，２人は再確認することになる。馬で行こうと提案する Elfride に，自分は馬に乗れないから歩いて行くと Stephen は言う。Elfride には全ての人が乗馬術を心得ているというわけではないということも理解できない。そして，慣れない手つきで Stephen が彼女を馬の鞍に乗せようとして，うまくゆかず，彼女の足がしたたかに地面に着いてしまった時，立腹した表情を見せる。Stephen はここでも自分の不器用さを悔やんでいるのである。

Elfrideはと言えば，チェスの場面でも乗馬の時でも，自分が Stephen のどういう弱味を指摘しているかも知らず，度毎に彼に社交の不器用さを気付かせている。Stephen はこれに反発することはない。そして，自分の不器用さを深く認識すればするほど，Elfride が身に付けている才芸に賛嘆する。Stephen は前の言葉からも分かるように，Elfride を自分より優れた人として賛美する気持ちから愛している。このことは彼の人間性の未熟さを遺憾なく示している。Elfride は彼

の従順な態度と反比例して，態度が女王然（imperatively）となっていく。出発の時に命令口調で，イヤリングから目を離さずにいて，落ちたときは教えるように命じ，更に崖へ行く途中で John Keats の *'La Belle Dame sans Merci'* を口ずさみ，自分が「つれなき美女」に見えるかと尋ねる。一方 Stephen は，彼をじらしている Elfride にキスをしようと躍起になっている時，彼女を掻き口説く。

> You know I think more of you than I can tell; that you are my queen. I would die for you, Elfride!'
>
> A rapid red again filled her cheeks, and she looked at him meditatively. What a proud moment it was for Elfride then! She was ruling a heart with absolute despotism for the first time in her life.（第 7 章）

Elfride の性格や Stephen と彼女の関係の有り様が，これら 2 つのシーンから窺えるが，高慢で媚びを含んだ女王と純愛を捧げる騎士といった 2 人の関係はここでほぼ確立し以後変わることはない。

しかし，ハーディは Elfride のこのような振る舞いを許しているのではない。彼女の危惧した如く，イヤリングの片方は崖の上で Stephen とキスを交わした時，なくしてしまう。後になって Knight と共にこの崖の上にいる時，運悪くそれが見つかってしまい，彼との間に気まずい雰囲気が流れ，彼に過去の恋人と婚約したのかと詰問され窮地に陥る。また以前 *'La Belle Dame sans Merci'* に自分を譬えたのと同じような場面を Knight と迎えた時，ハーディはこの詩を引用して「魅惑的な女性について気の利いた批評もなかった」とわざわざ皮肉な解説をしている。

Stephen は何事にも，自分の上に女王のように君臨している Elfride（第25章）の意志に基づいて決定を行っている。駆け落ちしてロンドンまで行き，結婚しようという間際になって，Elfride が結婚を取り止めたいと申し出た時，いとも簡単に彼女の望みに応じ，永久に彼女を失ってしまう。彼女は彼にこうして専制君主的地位を築き，Stephen が隷属的服従によって整えた環境だけをうまく利用している。彼の方は彼女の臣下であることを幸せに思い，崇拝の念を抱き続ける。彼はこの優れたものに対して崇拝の念を抱き，恭順の態度を示すという性質のため，友であり師でもある Knight に対しても類似した関係を結んでいる。

Stephen は自分の婚約者を Knight に奪われた時でさえ，彼のことを最も優れ，最も賢明な男であると思い，彼のやり方を全て正当なものと受け取っている。

> He was grieved, for amid all the distractions of his latter years a still small voice of fidelity to Knight had lingered on in him. Perhaps this staunchness was because Knight ever

treated him as a mere disciple — even to snubbing him sometimes; and had at last, though unwittingly, inflicted upon him the greatest snub of all, that of taking away his sweetheart. The emotional side of his constitution was built rather after a feminine than a male model; and that tremendous wound from Knight's hand may have tended to keep alive a warmth which solicitousness would have extinguished altogether. (第38章)

Stephen は Knight に単なる弟子扱いをされ，冷たくあしらわれていたが故に，彼に対して強い忠誠心を抱いていた。更に彼に自分の恋人を横取りされるという冷酷この上ない極め付きの仕打ちを受けたからこそ，彼への温情を留め置いたというのである。自己を他者に隷属せしめ，忠誠心を抱き，その上，他者の犯した過失を単に受動的だけでなく，苦しみの中にある種の快感を覚えながら耐えていくという，自虐的傾向があるのである。これをハーディは，Stephen の気質の感情的面が，「男性的というよりはむしろ女性的なものを原型にして構成されている」からだとしている。それ故，Stephen のような男が女性の前に出た時，常に慇懃で女性の望みに喜んで従うという振る舞いをするのは当然であろう。

この Stephen の気質につけ込んで，気まぐれな Elfride は彼を翻弄する。彼女は結果的には，Stephen の求愛を気まぐれな感情で楽しんでいるに過ぎない。彼と結婚するために，ロンドンに行き，駅に着いた途端にヒステリックな発作を起こす。そして，Stephen に変心の理由も説明できないまま帰途につく。衝動的な発作のような行動で始まったこの駆け落ちは，もともと移ろい易い感情に支えられた矛盾に富む行為だったので，目的を成就することは期待できない。セント・ローンシス駅に戻るとすぐに，「ロンドンに行ったからにはあなたと結婚すべきだった」とか，「あなたとこんなに深入りした後で，私他の誰と一体結婚できると思って？……私のために家を持てたら私をもらいに来て下さい」などと，理性からかけ離れ，感情に任せた衝動的な言葉を発して，Stephen にインド行きを決心させてしまう。そして、Stephen がインドに滞在して留守の間に Henry Knight と恋に落ちることになる。

Knight は物語の舞台に登場するまで，Elfride や読者の注意を引くために，Stephen の話題の中に１度ならず出て来るように配慮されている。第７章のチェスの場面で，もう彼の名前が出て来る。Stephen は彼に借りた本でチェスを覚えたのだし，ラテン語もこの「イギリス随一優れた人」から通信教育で習ったのだと Swancourt 父子に告白している。ウィンディ・ビークで２人が初めてキスを交わした時，Stephen は「乗馬は上手ですが，キスはうまくできないのですね。友人のナイトが話していましたが，それは女性の見事な欠点ですって」（第７章）と言って，Knight の重要な女性観を Elfride にも読者にも前以て知らせている。このように Knight の名前は Elfride と Stephen の重要な場面には必ずと言って良いほど出て来ている。そして Stephen が Elfride に多少優越感をもって述べた上の言葉は，彼のプライドを少し満足させると同時に，Knight の女性に対する強迫観念を暗示している。Knight は自分の愛する女性は男性と交際の経

験はあってはならないという不動の固定観念に脅迫され，物語の後半に Elfride を窮地に追い込んで行くのだが，この言葉はこれからのストーリーの悲劇的展開を予告する重要な伏線となっている。

Stephen を愛してはいても，何となく物足りなく思っている Elfride が，彼が崇拝し，口を極めてほめる未知の男性に反発をしながらも，多少は関心を抱くのは，彼女のように気位の高い移り気な女性にとって全く自然のことである。

> 'You shall know him some day. He is so brilliant — no, it isn't exactly brilliant; so thoughtful — nor does thoughtful express him — that it would charm you to talk to him. He's a most desirable friend, and that isn't half I could say.'
>
> 'I don't care how good he is; I don't want to know him, because he comes between me and you. You think of him night and day, ever so much more than of anybody else; and when you are thinking of him I am shut out of your mind.'（第 7 章）

「私とあなたの間に割り込む」Knight は迷惑だが印象的な存在として，ここで既に Elfride と Stephen の間に大きな障害となって現れている。Elfride が Stephen の愛を競い合うライバルとして現れているのである。

Knight が初めて実際に登場する時，Elfride にとって彼はまたもや「優れた男」ではあるが，好ましい男ではなかった。彼女の書いた騒士道ロマンスについて大変辛辣な書評を新聞に発表した評論家として姿を現すのである。勝ち気で虚栄心の強い彼女は彼に会う前からプライドを傷付けられ，負けん気を掻き立てている。しかし，所詮は世故に長けた中年の弁護士兼評論家と世間知らずの向こう意気が強い小娘とでは勝負にならないのは目に見えている。Stephen との関係にも，彼女自身の書いた本についても，Knight は彼女に不愉快な印象を与え，反発の心を起こさせているが，若い男女の間ではこの反発心のベクトルが方向を変え，同じ強さの愛情に変化することは往々にしてあることである。いずれにしても暫くの間，両者の関係が落ち着くまでは小競り合いが続く。

Knight の優位は動きようはずもない。過酷な批評をされて，ひどく不安で悲しかったと，Elfride の彼に抗議する態度は「厳格な教師に対する子供の憤り」を示すものであった。一生懸命に背伸びして彼に対抗しようとするのだが，世慣れていない彼女は，Knight に「僕の何についてそんなにじっと考えているのですか」と聞かれると，思わず「あなたはなんて賢い方かと考えていたのです」と正直に無邪気に本心を漏らしてしまう。この言葉は前に Stephen が何でもよくできる Elfride に感嘆して言った言葉と同じであり，作者は Elfride の Knight に対する立場が，Stephen の Elfride に対する立場と入れ替わって，Elfride と Stephen の立場は全く逆転した状態になっていることを読者に知らせている。Elfride の気持ちはこのように Knight に傾き始め，

「その晩は初めて，スティーブンのことを全く考えずに床に就いた」（第17章）という作者の説明文は２人のこれからの関係を強く暗示している。

この２人が最初に遭遇した「事件」はこの翌日起こった。Elfride は Knight と改築を目前に控えたウェスト・エンデルストウ教会の塔に登る。そこで，子供っぽい無邪気さで，慣れていると言いながら，衝動的に胸壁を歩き出す。そして，バランスを失い，危うく命を落としそうになる。彼女は，Knight に「愚かな行為」をしたといって大変叱責される。Knight が「賢い」ことを認めざるを得ない Elfride に向かって，彼は「馬鹿げている」「愚かである」と何度も言って，非難する。これには Elfride は，たわいもないが，危険な行動に出た結果，大事に到らなかったにしても，ひどい切り傷を負ってしまったので，反論しようがない。ここで，「賢い」Knight と「愚かな」Elfride という構図が明瞭となる。これを発端に，彼女は Knight に対して益々劣勢になってゆく。またこの事件は，*A Pair of Blue Eyes* に描かれている２つの墜落の恐怖のうちの１つで，死の想念がはっきり Elfride に忍び寄る最初のものである。「死の影が身近に迫っていて，彼女は，彼が言葉をかけないうちに，ぞっとして死人のように青ざめていた」（第18章）とあるように，Elfride が最後に死に到るという，死のイメージは，「名無しの崖」での墜落場面で更に強調されることになる。

勝ち気な Elfride は，この時の失敗で失った面目を，夕方チェスに勝つことで回復しようと努力する。しかし，Stephen と立場が入れ替わってしまっている Elfride は，Stephen と同様に完敗してしまう。Knight の最初の「待った」を「待ったなし」と勝ち誇って彼の駒を取ってしまう。だが，次からの Knight は，彼女の「待った」も聞かず，情け容赦なく勝負に出て，彼女を３番続けて負かしてしまう。負けん気な Elfride は悔しくてその晩まんじりともせず，将棋の本と首っ引きで明け方まで研究し，翌朝再度挑戦する。余りに興奮して将棋を指している Elfride を見て，Knight は負けてやろうとする。だが対戦の途中で Elfride はそれに気付き，そんなことをするのは侮辱だと色をなして怒る。それを受けて Knight は「あなたには勝たせない」と冷静に言う。両者の精神状態を見るだけでも勝敗は明らかである。Elfride の必死の努力にもかかわらず，冷静にゲームを進める Knight は彼女を負かしてしまう。Elfride は自分の部屋に駆け込み，ベッドに身を投げてくやし涙にくれるのである。自分の実力を過信していた Elfride にとって，この敗北は大変なショックであった。

ここで作者は，Elfride と Stephen の対局を引き合いに出して，「エルフライドの今の心情と，スティーブン・スミスが勝てるようにわざとへまをした時とはなんと違っていたことか！」と述べているが，確かにこの２つの対局は際立った対照をなしている。作者はこれから，この２人の男性に対する Elfride の行為を対照的に示し，彼らの間を揺れ動く彼女の女心を描いてゆく。少々図式的な嫌いもあるほどに Elfride は Stephen との経験を，Knight と共になぞってゆく。未だ駆け出しの建築家であり，人生の経験も少なく，人間的に未成熟で，また女性的気質を持ち，

Elfrideとの関係でも逡巡することの多いStephenと，既に文芸評論家としても社会的地歩を固めている弁護士で，強靱な知性と，威厳を備えた容貌を持った，男性的人物であるKnightを比較対照しながら，ハーディは彼女の女心の揺れを描くのである。またElfrideとStephenとの間で起こった事件と，ElfrideとKnightの関係が誘発した事件を対照させながら，物語を進行させてゆく。更に，Elfrideの態度がStephenに対しては支配的であったが，Knightに対しては隷属的になっていて，チェスのゲームの進行と結果が，Elfrideの両者に対する立場をはっきりと暗示しているのである。

手痛いチェスの2度目の敗北の後，ElfrideはKnightの前に出ると「大寺院に入った感じ」'the effect of entering a cathedral'（第18章）を抱いた。この時からElfrideの移ろい易い感情は，Knightの方に強く傾いて行き，彼に自分の女性としての存在を認めさせようと努力する。散歩中の2人が出会った時，Knightがノートをつけているのを見ると，興味を持ちそれを無理に読ませてもらう。それには自分のことが子供のように書いてあったので，気分を害し，「私はもう一人前の女性です」と言って抗議する。これはStephenに以前大人扱いされてElfrideが喜んだのを読者に思い出させる行為である。このように，KnightのElfrideに対する態度は，Stephenのそれとは対照的である。Elfrideは，Knightに自分のことについて気に入る答えを引き出そうとして，女性についての好みを尋ねるが，彼は彼女の期待に反して，年より若く見える女性より老けて見える女性の方が好きであり，彼女の髪のような薄い茶色より栗毛色の方がよいと思うと答える。必死になって期待する答えを引きだそうと努力する彼女は，自信を持っている青い眼を持ち出して，答えを待つが，彼の好きな色は「薄茶色」であった。最後の一勝負に全てを賭ける勝負師のように追い詰められた気持ちで，勝負を挑んでまたもや負けてしまったのである。ここには女らしい媚態を武器に，Stephenの心を自由に操った時の余裕は露ほども見られない。人一倍虚栄心が強く，人の注目を浴びるのが好きなElfrideは，自分の魅力にKnightの眼を引き付けることができなかった。そのために心が大いに傷付いたはずなのに，彼が彼女の誇りを傷付けるようなことを言えば言うほど，その言葉が真実に思えて，彼を尊敬する気持ちになった（第18章）。以後Knightにすげなく振る舞われれば益々それだけ彼に引かれてゆくのである。

人目を引き付けるのが好きなElfrideは，身を飾ることが好きである。殊にイヤリングに対する執着心には驚くべきものがある。Stephenに対しても女王然としてイヤリングをなくさないように監視するように言いつけ，実際なくしたら探しに行かせたし，Knightに対してもイヤリングは一番好きなものだと言う。このように，彼女の好きなイヤリングは，虚栄心を表すものとしての役割を担って，幾つかの象徴的な場面を引き起こしている。このイヤリングをなくしたのは，崖の上でStephenとキスをした時であった。そしてイヤリングを巡って彼女は女王然とした大変傲慢な態度をとり，Stephenとの力関係を示したのである。

第20章の冒頭で，日頃冷静沈着な中年男のKnightは，Elfrideに恋をして，落ち着きを失って

しまう。作者はここでも Stephen と Knight の恋の違いを指摘している。「スティーブンは見ることでエルフライドに恋をした。ナイトは見ることを止めたことで恋に落ちた」のであり，Stephen は目の前に存在する美しい女性を賞賛し夢中になったのだが，Knight は不在の Elfride が自分の心を大きく占めていることに気付き，その不在に耐えられなくなった。それ故，Stephen は現実の Elfride を全て受け入れるが，「ナイトは浪慢的というより，哲学的な恋をしている」ので，彼女を理想化し，その理想像に恋をして，必ずしも現実の彼女に恋をしていない，ということになる。現実的な恋をしている Stephen とは違って，恋も観念的，哲学的である Knight は，Elfride を自分に都合のよい「理想的な」女性に仕立て上げてしまっている。

> Knight argued from Elfride's unwontedness of manner, which was matter of fact, to an unwontedness in love, which was matter of inference only. *Incrédules les plus crédules.* 'Elfride,' he said, 'had hardly looked upon a man till she saw me.' (第20章)

後にこの考え違いが自分たちの恋を破局に追い込んで行くことも知らず，Knight は少しずつ Elfride に恋人としての関心を引こうという行動に出る。その最初の手段が Elfride に宝石のイヤリングを贈ることであった。

Knight は万事に付け，Stephen と対照的である。頼り甲斐のないように見える Stephen より，Knight は「自分よりも強力な男性を魅惑して左右したい」という女性一般の支配的情熱に答え得る人物と，Elfride の眼には映る。興奮し易く感情に流れ易い Elfride であれば，Stephen を脇に置いて，Knight に強く引かれ始めるのも無理はない。第20章では Elfride の心に，Stephen と Knight のどちらへ向かうかに苦しむ試練が課されている。Elfride は Knight からのイヤリングと Stephen から送られて来た200ポンドの預金領収書を実際に目の前に置いて，どちらを取るか迷い苦しむが，結局悔し涙を流しながらも Knight のイヤリングを返す決心をする。心から Stephen を選んだのではなく，かつて結婚の約束をしたために，「乙女らしい礼節観から，考えられる唯１人の夫と見なさねばならない男性へのわが身の犠牲を考え」ながら決断したのである。彼女の移ろい易い心は，既に Stephen のもとを離れ Knight に移っているのだが，理性が何とか引き留めている状態であり，彼女の Stephen への愛情は風前の灯火のように危ういものになっている。

次に続く場面はこの作品最高の山場で，Knight と Elfride が迫り来る死を目前にして，恐れおののきながらも，絶望的な窮地から生還するのである。これは前に Elfride が経験した教会の塔から危うく墜落しそうになった場面の人物を入れ替えた，意図的な繰り返しである。この断崖はその表情が強烈な印象を持っていて，Elfride は最初から恐れを感じ，正視し得ないでいる。そして断崖の向こうの海には，Stephen の乗っている蒸気船が滑るように進んでいる。この断崖は Elfride と Stephen を隔てる障害のようだが，更にそれに Knight が加わる。彼はこの「名無しの

崖」の上で帽子を落とし，それを拾おうとして誤って絶壁の庇に落ちる。そこで足がかりを失って，墜落の危険と必死に闘う羽目に陥る。Elfride も自分の下着を引き裂き，綱をなって，Knight を救助するために必死の思いで努力する。その眼には Knight の姿の向こうの海を静かに走る船が映っていた。絶望の淵から引き上げられた Knight は，Elfride に心から感謝の念を抱く。Elfride は，死の淵に臨んでなお，平静を失わず微笑みかける Knight の姿に深い感動を覚える。彼女はこの時彼のために10回でも死ねると思う。Stephen も以前はこれと同じ気持ちを Elfride に抱いている。Elfride は，彼女に対して心身共に捧げるほど恋心を抱く Stephen と同じくらい Knight に深く恋するのである。Knight を助け出した時，Elfride の心の中には抑え難い歓喜がほとばしり出した。

> At the moment of embracing, Elfride's eyes involuntarily flashed towards the *Puffin* steamboat. It had doubled the point, and was no longer to be seen.
>
> An overwhelming rush of exultation at having delivered the man she revered from one of the most terrible forms of death, shook the gentle girl to the centre of her soul. It merged in a defiance of duty to Stephen, and a total recklessness as to plighted faith. Every nerve of her will was now in entire subjection to her feeling — volition as a guiding power had forsaken her. To remain passive, as she remained now, encircled by his arms, was a sufficiently complete result — a glorious crown to all the years of her life. Perhaps he was only grateful, and did not love her. No matter: it was infinitely more to be even the slave of the greater than the queen of the less. Some such sensation as this, though it was not recognized as a finished thought, raced along the impressionable soul of Elfride. (第22章)

もうこの時点では，Elfride の心の中にも，視野の中にも，Stephen の乗っているパフィン号はいなかった。そして彼女は「劣った者の女王で君臨するよりは優れた人の奴隷になる」ことを選んだのであった。Stephen と Elfride の関係での彼女の立場は，Knight と Elfride の関係では全く逆転してしまった。ハーディは Stephen が「優しく従順」であるがために Elfride に愛され，またそれ故に捨てられたことを，繰り返し強調している。Elfride の最初の恋人 Felix Jethway も Stephen と同様に「優しく従順」であったので愛され，またそれ故軽く見られて捨てられてしまった。Elfride は自分が描く中世の騎士のように，ひたすら純愛を捧げることのできる相手，そしてもっと男らしい，強引な男性を求めていた。Knight は今までの２人の男性よりずっとこの条件に当てはまっていた。今度は彼女が献身的に仕える番であった。そしてこの２人の男性と同様に，余りにも Knight に優しく過ぎて，彼らの轍を踏み，彼らと同じように愛する者に捨てられてしまう。

断崖の場面の重要な意味は，Stephen という未だ公表していない婚約者がありながら，Elfride が Knight を受け入れざるを得なくなるという，心理過程の必然性を説得力をもって示し，上に

述べたように今後の彼女の恋の行方をも暗示している点にある。ハーディは数々の印象的なエピソードを場面として構成することに巧みな作家であった。これらのエピソードは多くの場合，主要人物の心理的変化を読者に自然に理解させ納得させる効果を意図して描き出されるのである。この場面はハーディの特徴が典型的に現れている１つの例である。

更に，この場面は死のイメージに満ちている。ハーディは上述の効果以外に，意図的にこの断崖に死の想念を結び付けようとした。救助を待って Knight は岩の斜面にへばりついた。その時，眼前の岩に浮き彫りのようにはめ込まれた三葉虫の化石を見る。数億年を隔てて化石の眼と Knight の眼が互いに見つめ合う時，歴史的な途方もない時間が一挙に消滅し，人間は人類誕生の遙か以前に，無に限りなく近い，卑小な存在に重ね合わせられる。この化石の眼は，人間の精神的な死とは，無を意味する卑小な存在と同じものだと訴えかけているように思えた。

この死のイメージはそのまま，Lady Luxellian の死去した後の地下納骨堂の場面に繋がっていく。この婦人の墓所を整備するために，Luxellian 家の納骨堂にいた父親のところに Stephen がやって来た時，父 Smith はこの家の過去にまつわる逸話を語る。Elfride の祖母 Lady Elfride Kingsmore は Luxellian 家の生まれであった。Arthur という歌手と仲が良くなり，親の反対を押し切って密かに結婚してしまう。父は最初烈火の如く怒ったが，やがて折れて家や金を与えるまでになった。その Elfride の祖母は最初のお産であっけなく死んでしまう。夫も悲嘆の余り同じ日に死んで，子供だけが残った。その子は母方の祖母の手で育てられ，やがてきれいな娘になり，Swancourt 牧師と駆け落ちして結婚する。その子供が Elfride であった。この事情が話された後程なく，Lady Luxellian の遺骸を納めた真新しい柩と Lady Elfride の巧ちかけた柩の前に，同名の Elfride が立つ。ここに不吉な因縁とも言うべき関係が確立する。祖母と瓜二つの姿をした，同名のこの娘は，近い将来に祖母と同じような状況のもとで，同じような死を迎える運命にある。Elfride はこの目に見えない因縁に導かれ，Lady Luxellian となり，納骨堂の新しく作られた角に，真新しい柩の中に身を横たえて，彼女らに仲間入りすることになる。

このように死のイメージに満ちている納骨堂に，Elfride は偶然に Knight と共に訪れる。２人が，埋葬のために開かれていた地下納骨堂の中を見に入ると，そこには彼女が裏切った，かつての婚約者 Stephen がおり，久振りで対面する。Elfride を挟んで２人の男性も暫く振りの再会をするが，彼女と Knight の間柄をほぼ理解できた Stephen は，彼との会話で，自分がかつて彼女の恋人であったことを感付かれないように，彼の問い掛けに素気なく答えるのであった。２人の男性を欺き続けている Elfride は，納骨堂の中で，彼らを間にして顔面蒼白になって立ち尽くすしかなかった。彼女は死者の近くに１歩近寄ったのである。Elfride の恋は，相手を如何に変えようとも成就されることなく，更に物語の最後の山場で実証されるように，結局その結婚は死とは切っても切れない関係にあることを示している。

Stephen が Elfride に捨てられたのは，彼女の欲求を満足させることができなかっただけでな

く，彼女を女王の玉座に乗せて崇拝し，常に従順で柔和な優しい態度を取り続け，決して逆らうことがなかったからである。Elfride にとって Knight から受ける知的で辛辣な仕打ちに比べれば，Stephen のいつも変わらぬ愛想の良さ，彼から受け取った快感は薄味で味気ないものに思えた。

> By the side of the instructive and piquant snubbings she received from Knight, Stephen's general agreeableness seemed watery; by the side of Knight's spare love-making, Stephen's continual outflow seemed lackadaisical. She had begun to sigh for somebody further on in manhood. Stephen was hardly enough of a man.
>
> Perhaps there was a proneness to inconstancy in her nature — a nature, to those who contemplate it from a standpoint beyond the influence of that inconstancy, the most exquisite of all in its plasticity and ready sympathies. Partly, too, Stephen's failure to make his hold on her heart a permanent one was his too timid habit of dispraising himself to her — a peculiarity which, exercised towards sensible men, stirs a kindly chord of attachment that a marked assertiveness would leave untouched, but inevitably leads the most sensible woman in the world to undervalue him who practises it. Directly domineering ceases in the man, snubbing begins in the woman; the trite but no less unfortunate fact being that the gentler creature rarely has the capacity to appreciate fair treatment from her natural complement. (第27章)

「遠慮深く」，寛大で優しい Stephen が，ロンドンで Elfride を力ずくでも，祭壇の前に引きずって行くという断固とした実行力を示さなかったのがそもそもの間違いであった。Elfride は男の強さを愛する女の性を持っていたのに，Stephen はそれを見せずに唯々諾々と彼女の我儘に従ってしまった。あの重大な時期に，Elfride に優位に立てる唯一のチャンスをみすみす失ってしまったのである。有無を言わさずに結婚してしまったら，両者の立場は完全に逆転してしまったであろう。上の引用文にもあるように，Stephen が彼女の心をしっかりと繋ぎ留めることができなかったもう１つの理由は，彼女に向かって自分を遠慮勝ちに低く評価して見せたことである。女性というものはどんなに賢くとも，そのような男を必ず低く見る。だから男性に横暴さがなくなるととたんに，女性の肘鉄胞が始まるのである。Elfride の場合が正にそれであった。彼女は最初の恋人 Felix も，次の Stephen もその「優しさ」故に，軽々しく扱った。しかも彼らがそのような扱いを甘受したのは，彼女の「かわいい尊大さ」や「つれない仕打ち」に惹かれたからであった。このように，彼女の魅力は尊大でコケティッシュであるところなのに，Knight に恋したとたん，それまでとは打って変わって「優しい女性」に変わってしまう。Felix や Stephen の占めていた場所と入れ代わり，今度は彼女が Knight の「つれない仕打ち」に心をかき乱されることになる。

駆け落ちという常軌を逸脱した行為によって，もうどうすることもできないほど Stephen に縛り付けられてしまったと思っている Elfride は，この体験を実際よりもずっと悪く評価している。この駆け落ちは未遂に終わっており，実際には２人はただロンドンに列車で行って帰って来たと

いう単純な事実であった。かくして，Elfrideは罪はおろか，許しがたいほどの愚行すら犯していない。だが，恥ずかしい気持ちから来る，ちょっとしたいじらしい取り繕いが，彼女を追い詰めて行くことになる。自分の過去を早目に打ち明けて彼の許しを乞いたかったが，恋する若い娘の常で，恋心が深くなればなるほど告白した結果についての不安も大きくなるのである。逡巡する間に，益々告白の代価は高くなって行く。納骨堂でStephenと会った翌日，彼女はKnightに告白しようとするが，その直前別の当たりさわりのない告白をする。そのことで、Knightは彼女を正直だと褒めてくれる。だが次の瞬間，彼女はより厳しい要求をされることになる。「僕は女性に求めたい1つのことがある。それは天の光のように真実に満ちた汚れのない魂です。もし僕がその魂を得るなら，何にでも堪えられるでしょう」とKnightは言って，彼女の越えなければならないハードルをもう一段高くするのである。

Elfrideは自分の過去を何とかして告白しようと機会を窺っている。Knightの過去の恋愛経験を聞いた後，自分の過去を告白しようと，Elfrideはプリマス行きの船上で彼と話す機会を捕まえる。彼女の期待に反して，Knightは過去に全く恋愛経験がなく，キスをしたのは母親とElfrideの2人しかないことを誇りにしている。彼は恋愛経験のない女性にしか魅力を感じないので，もし過去にElfrideが婚約をしたことがあったりしたら，求婚することはなかった。だから自分がキスする唇には1度もキスしたことのない唇しか認めない，と彼は主張する。KnightはElfrideにも，自分と同様，未だ恋愛の経験がないと思うからこそ，彼女に夢中になっているのである。

Knightは過去に恋愛経験がないことを誇りにしていると同時に，女性にも絶対に純潔であることを要求する。将来の伴侶を選ぶ際，偏狭で独り善がりの貞操観念を尺度に持ち出すのである。理知的なKnightは勿論，女性に関する一般的概念は心得ているが，女性心理の機微を具体的に見抜く洞察力には欠けている。即ち，観念的には女性についての知識はあっても，今まで女性と交際したことがないので，生きている人間としての女性への対応は，未経験故の生硬さが全面に出て女性を不安にさせるのである。

知識の優位を信じるKnightは，繊細で傷付き易い心を知識の鎧で守っている。彼は恋愛の経験がないために，経験のある女性の前では，自分の方が恋愛についての知識が少なく，自分を優位に保っておく自信がない。婚約者に対して，恋愛についてより良く知ることが少ないと認めることは，自分の品性を冒瀆することと見えるのである。

> 'Because you know even less of love-making and matrimonial prearrangement than I, and so you can't draw invidious comparisons if I do my engaging improperly.'（第29章）

と言った時，Knightは自分の本性を暴露している。ここに全く無垢の女性しか愛することの

できない大きな理由の１つがある。そして，後にElfrideに恋人がいたことが発覚した時，彼女の誠意のなさより，自分を彼女の嘲笑の的にしてしまったと考えている自分の眼識のなさに，ずっと腹を立てている。Elfrideの彼についての気持ちより，彼の自尊心を傷付けたことの方が堪えられないのである。

このようにして，Knightの愛を繋ぎ留めておきたいと切望するElfrideの前に，駆け落ち未遂事件は重大事として出現することになる。Stephenと大きな過ちを犯してしまったと思い込んでいるElfrideの上に，この過去は大きな悪夢のようにのしかかってくるものであった。ElfrideはKnightに隠し通すことの苦痛に堪えられず，告白の衝動に駆られるが，なかなかその勇気が出ない。かつてStephenとの関係で禍を招いた，優柔不断な行動をとっている。長く隠せば隠すほど，告白が困難になってゆくことも承知しているし，告白しなければならないのなら，早いうちに告白してKnightの許しを乞う方が，恋愛関係において上索であることにも気付いている。だが，真に重大な過失がどんなものか知らない（第31章）Elfrideは，自分の過失を必要以上に大きなものと空想して，Knightを失ってしまうのではないかと心配する余り，告白できない。このように迷っているうちに，彼女の意に反して，身辺の小さな出来事が徐々に過去を明らかにして，彼女を少しずつ追い詰めてゆくのである。

「愛の下僕」(Vassal unto Love)と名付けられた第30章でもそれは起こる。Knightは暫くElfrideのもとを去る時，Elfrideの思い出の形見として花を貰いたいと言う。その時申し出た花は，偶然にもStephenが愛の形見としてElfrideに託した天人花であった。如何に捨ててしまった恋人から託された花でも，これを手放すことは非情極まりない仕打ちに思われる。それで，その花は他の人からの贈り物だからと言って，別の天人花をKnightに与える。この出来事までElfrideは，自我を捨ててKnightの言い分には何１つ逆らわなかった。ただひたすらKnightに寄り添い，全身全霊を傾けて貞節心を捧げていた。

> The unreserved girl was never chary of letting her lover discover how much she admired him. She never once held an idea in opposition to any one of his, or insisted on any point with him, or showed any independence, or held her own on any subject. His lightest whim she respected and obeyed as law, and if, expressing her opinion on a matter, he took up the subject and differed from her, she instantly threw down her own opinion as wrong and untenable. (第30章)

全く奴隷的な女性になってしまっていたのである。だが特にこの天人花に限ってこだわることは，当然Knightの気にかかる。Knightの心にここで初めて，Elfrideには過去に恋人がいたのではないかという疑念が芽生え，彼女を問い詰める。Elfrideはしどろもどろになり，結局恋人がいたことを白状することになる。

Knightは，愛する女性の心の中に入る最初の男性でありたいと常に思っているので，これには我慢できない。この時から彼はElfrideの過去を暴くことに夢中になる。そして次第に，恋人であるはずの彼が敵意に満ちた審問官になってゆく。Elfrideが彼を余りにも甘やかしてしまい，彼に独裁者としての権力を思うように振るってよいと思わせてしまったからである。

> Male lovers as well as female can be spoilt by too much kindness, and Elfride's uniform submissiveness had given Knight a rather exacting manner at crises, attached to her as he was.（第30章）

Knightの疑念は一旦心の中に芽生えてしまうと，打ち消そうとすればするほど，心の中で増殖し益々はびこることになる。最初の疑念を抱いた時，Knightにとって「彼女の頭のまわりの光輪から1つの光が消えた」。Knightがこの疑念を晴らそうと，Elfrideを徐々に厳しく詰問して行く過程とその結果は，先に述べた2人のチェスの勝負が象徴している。Elfrideは，彼の強さと己のひ弱さを知らずに戦うが，強力な相手であるKnightの前では，陣地は結局崩され，完全な敗北を喫するのである。

そもそもKnightは自尊心の強い男である。その上，非常に感じ易い人物でもある。文芸評論家として活躍しながら，何年も韻文の研究と詩の労作に没頭して，自分の書斎の中だけで過ごしている間，感情面をのみ発達させてきたので，内気で感じ易く繊細になってしまったKnightは，自分を傷付けることのない人にしか打ち解けて話し掛けることができない。自分を利用したり，非難したり，また自分の競争相手となったりすることのない相手には，腹蔵無く話し掛け，打ち解けられる（第15章）。Knightにとって，Elfrideは最初から競争になるような相手ではなかった。チェスのゲームでも，Elfrideの失索には容赦のない厳しい仕打ちをするし，女性の美しさについてもElfrideの期待するものとは相容れない意見を述べる。Knightは言いたくないお世辞を敢えて口にするような人物ではないのである。

だが，自尊心の強いKnightは言葉で人を傷付けることはあっても，自分が傷付けられることはひどく警戒する。些細な批判や反論にも堪えられない。Elfrideに自分の欠点について言うように強要しておきながら，彼女が猫背や禿げのことを指摘すると，簡単に動揺し気分を害する（第18章）。また，KnightがElfrideに恋した初めの時期に，イヤリングを買って贈ろうとした時，彼女はStephenのことが頭にあったので，欲しかったがやっとの思いで断る。Knightは，彼女が余りに頑固に断るので，恋する男が女性の気を引くために贈り物をしているのだという印象を，彼女に抱かせてしまったのではないかと心配する。それを払拭するために，宝石類への彼女の偏愛についての彼の言葉は不愉快で公正を欠いていたので，それを償うために，お詫びするのにこうした実際的形式をとったのだと説明する（第20章）。このようにKnightは他人より優位に

立ち，弱味を絶対に見せたくないと常に構えている。それ故，自分より地位，年齢，能力，経験などが劣る者や，あるいは親族などといった，心配する必要のない判断しか下さない人々の中にいる傾向がある。そして，このような人々の中では安心して自信を持った行動がとれるが，その態度には往々にして自信以上に不遜なところがある。この性格のために無垢な女性しか愛せないし，Elfride に対する態度は正にこの通りである。また Stephen に対しても昔と変わらない愛情を持ってはいるが，隠し切れない態度が表に現れる。Stephen が立派に成功した建築家になって Knight の前に現れても，彼は相変わらずパトロン的な，慇懃なうちにも尊大な態度で彼を扱い，自分の婚約者など正式に彼に紹介するなど全く馬鹿気て，不必要なことと思っている。Knight にとって，Stephen は相変わらず彼が心に掛けて引き立ててやった田舎者に過ぎなかった。この Knight の態度は本人は気付かないが，Stephen の気持ちを深く傷付ける。Stephen は田舎の石屋の息子という己の運命の強烈な残酷さを意識し，つらい思いをするが，Knight は他人の心の痛みなど殆ど気にしない。

Knight の自己中心的な考えは女性を愛する気持ちにまで及んでいる。Elfride を恋しても，愛他主義的な考え方よりは，自愛の念の方を強く示す。Elfride に対しても，彼女の人生において最初の恋人としての役割を演じたいと願う。彼に愛してもらったという感謝の気持ちと，献身的な愛情を独占しようと，男性の愛も彼を通じて初めて知ってもらいたいと考えている。Elfride は彼の独占物でなければならないのだ。彼女の現在のみならず過去をも彼のものにしないではいられない（第31章）。彼の愛は真に利己的な愛である。女性についての彼の理想像を決して変えない。その像に合わない恋人を決して許そうとしない。Elfride の過去は彼の理想に必ずしも合致するものではなかった。この先，Knight のこの妄想とも言うべき理想は，Elfride の過去が明らかになることで粉々に打ち砕かれてしまう。この時，最早彼女は彼にとって以前の彼女とは同じでなくなってしまう。

Elfride に対して芽生えた彼の疑念はどんどん強いものになってゆく。

> 'I always meant to be the first comer in a woman's heart, fresh lips or none for me.' How childishly blind he must have seemed to this mere girl! How she must have laughed at him inwardly! He absolutely writhed as he thought of the confession she had wrung from him on the boat in the darkness of night. The one conception which had sustained his dignity when drawn out of his shell on that occasion — that of her charming ignorance of all such matters — how absurd it was! （第30章）

このような，自分が彼女の心の中に入って行った最初の男性ではないという事実に直面した時の彼の内省は，彼の性格をはっきりと映し出している。彼女が自分よりあらゆる面で劣っており，また恋愛の経験などは全くないと思っていたので，つい心を許し，自分の殻から引き出され，本

心を語ってしまったことを，弱味を見せてしまったと思い，自尊心を傷付けられ，大変に悔しがった。彼には今まで女性関係が全然なく，彼女にはかつて恋人がいたということは，彼の方が恋愛の面では，彼女より経験が浅く，知るところが少ないことを証明することであったからである。恋人という後光が薄れてしまえば，Elfride は彼にとってただの小娘にしか過ぎない。すると，突然ただの小娘に引きずり下ろしてしまった Elfride に愛を寄せていたことを後悔し始める。Knight はこの先 Elfride の過去が明らかになるにつれて，益々彼女に対する尋問に厳しさを加えてゆく。しかし，Elfride は既に Knight の尋問に抗し得る相手ではなかった。

> Elfride's docile devotion to Knight was now its own enemy. Clinging to him so dependently,she taught him in time to presume upon that devotion — a lesson men are not slow to learn. A slight rebelliousness occasionally would have done him no harm, and would have been a world of advantage to her. But she idolized him, and was proud to be his bond-servant. (第30章)

Elfride は Knight の奴隷になることを誇りに思っている。彼は彼女の隷従によって彼女に対する自分の力を知るのである。Elfride が自ら奴隷的態度をとるので，Knight は必然的に主人のように彼女を扱うようになる。Elfride が自我を完全に没した隷従的態度をとっても，Knight が紳士が淑女に払うような敬意を彼女に払えば，２人の関係は破局に到らなかったろう。だが，その反対の態度をとる Knight が相手では，Elfride の態度は，彼女の不誠実な言動以上に彼女自身を傷付けてしまっているのである。彼女のこのような態度は恋人の双方に悪い結果を引き起こしている。Knight には増上慢な行為をとらせているし，Elfride には彼の前で自分を守ることもさせなければ，自らの愛で彼に大きな活力を注ぎ込むという能動的な意志を示すこともさせない。そして，２人の間に起こる出来事は，Elfride を益々追い詰めてゆく。

Knight の提案で，２人はウィンディ・ビークへ行く。前回 Elfride は Stephen とそこへ行ったのだが，今回も Elfride が馬に乗り，Knight が Stephen の代わりに歩くことになる。ここでも Stephen と Knight の立場は対照的に描かれ，Elfride は「より優れた人の奴隷になるため，より劣る者の女王としての立場を全く放棄」(第31章) してしまっている。この２人がウィンディ・ビークで座った場所は，たまたまかつて Elfride と Stephen が座った場所と一致する。Stephen との仲が父に許されていると思われた頃，愛用のイヤリングを付けて，Elfride は彼と一緒にウィンディ・ビークへ行き，熱い抱擁の最中に，イヤリングを片方落としてしまった (第７章)。そして今ここで，紛失したイヤリングを岩の裂け目で偶然に発見する。彼女が何度か (第19，28章) 不用意に口を滑らせ，彼女に恋人がいたのではないかという疑いを，Knight に抱かせるようになったものである。Elfride もそのことを承知していてこっそりそれを取り出そうとする。その動作が Knight の目に留まって，遂に問題のイヤリングが発見される。Knight は彼女を詰問

し，密かな婚約のあったことが暴露される。それからは，一旦はずみのついたKnightの詰問は止まるところを知らず，Mrs JethwayのElfrideの過去を暴き立てる手紙を入手したことと相俟って，過去の全部をElfrideに告白させる。Elfrideは過去の恋人のことを最後まで，自分の口から進んで打ち明けようとしないで，Knightから捨てられるのである。

ほぼElfrideの過去を知ってしまった時，Knightは彼女と結婚できないと言うのだが，彼の仕打ちに対する彼女の「わたしは新鮮さは別として，何の魅力のないような ― 単なる人格のない人形のようなものでしょうか」という抗議は全く正しい。彼の「あなたを愛する余り，あなたを虐待してしまった」（第32章）という言葉は，幼い子供が小さな虫を珍しがって，興味を持っていじくりまわし，挙げ句の果てに殺して捨ててしまうという行為を読者に思い出させよう。Knightは，1個の人格を持ち，血の通った，生きている女性を愛したのではなかった。彼には自分の愛の論理に叶う，観念的に作り上げた女性像が先ずあって，それを勝手にElfrideに重ね合わせて愛してきたのである。彼女はKnightにとって，愛の理想を偶像化した存在であった。それ故，彼はその愛の理想からはみ出した部分を許すことができず，それを暴き立てて責め続けたのである。

Knightを余りにも深く愛していたElfride（第34章）は，悪い結果を恐れて，自分の過失を話すのを渋り，Knightの猜疑心を煽るのである。互いに相手を深く愛した恋人同士ではあったが，相互に理解し合い，信頼関係を築くことがなかった。これは，双方が相手を自分勝手に理想化して招いた悲劇であろう。

偶然の出来事や事件によって振り回され，運命を変えることを余儀なくされてきた主人公たちは，物語の最後の山場で3人共集まることになる。KnightとStephenは，Elfrideに再度求婚の申し込みをするために，エンデルストウに赴く。自らの死の予言をしていたElfrideは，Lord Luxellianの妻として死んだ遺体で，2人の男性の乗って来た列車に乗っていた。Elfrideは悲恋に末魂が死んでしまい，ほどなく肉体にも死が訪れた。作者の織りなす偶然の出来事は，最後まで運命の皮肉を表そうとしている。再度求婚しようと期待を胸に，Elfrideの住んでいるはずのエンデルストウにやって来た2人の男性は，最早生きたElfrideには会うことができない。この駄目押しとも言うべき偶然は，読者の同情を買うよりむしろ，読者は余りにも露骨な作意が見えるため苦々しい読後感に襲われる。Elfrideは魅力ある女性ではあるが，遠くから冷ややかに作者に観察されている存在に過ぎないように見える。前述のように，田園的属性を持ったStephenを，女王然として扱い，捨ててしまったElfrideは，自ら田園的属性の上に立っているにもかかわらず，教育を受けたため都会的心性を抱くようになり，都会的属性を持ったKnightに惹かれ恋に落ちる。しかし，真に都会的属性を持っているわけでないので，Knightに過酷な仕打ちをされ捨てられる。田園的心性を尊重するハーディにとっては，このように中途半端な，どちらにも属しているような，属していないようなElfrideはたとえ魅力的で愛すべき点が多くあろうと，

突き離した客観的な観察の対象にしか考えられなかったのであろうか。この作品では，ハーディは人物との間に距離を置き過ぎて，Stephen や Knight なども，事件を成立させるのに単に必要な素材として，実験的に起用されているだけのようである。この作品は作者の若書きのためか，これら3人のどの人物も，後の作品の登場人物に見られるような深い同情が感じられず，ただ作者の予定した結果に向けて，計算通りに進んで行くという印象は否めない。

参考書誌

1. *A Pair of Blue Eyes,* The New Wessex Editions; The Novels of Thomas Hardy, ed. by P.N. Furbank, Macmillan, 1975
2. Hardy, Florence Emily, *The Life of Thomas Hardy 1840–1928,* Macmillan, 1983
3. Cecil, David, *Hardy the Novelist,* Constable, 1969
4. Guerard, Albert J., *Thomas Hardy,* New Direction, 1964
5. Gregor, Ian, *The Great Web,* Faber and Faber, 1975
6. Hawkins, Desmond, *Hardy, Novelist and Poet,* David and Charles, 1976
7. Hurst, Alan, Hardy: *An Illustrated Dictionary,* Kaye and Ward, 1980
8. Millgate, Michael, *Thomas Hardy, A Biography,* Oxford University Press, 1979
9. Saxelby, F. Outwin, *A Thomas Hardy Dictionary,* Greenwood Press, 1980
10. Taylor, Richard H., *The Neglected Hardy,* Macmillan, 1982
11. Thurley, Geoffrey, *The Psychology of Hardy's Novels,* University of Queensland Press, 1975
12. 大沢衛（編）「ハーディ研究」（現代英米作家研究叢書）英宝社，1976
13. 大沢衛・吉川道夫・藤田繁（編）「20世紀文学の先駆者トマス・ハーディ」篠崎書林，1978
14. 小田稔「トマス・ハーディ」篠崎書林，1990
15. 小田稔（訳）「トマス・ハーディの小説における性格描写と運命形象」学書房，1980
16. 佐野晃「ハーディ」冬樹社，1981
17. 本田顕彰「ハーディ」（20世紀英米文学案内4）研究社，1969